



一曲  
序



## みづゑ 第三十一要目

前號要目

チームス河(水彩畫原色版) ······ PFTER.  
水 [中] ······ DE. WINT.

水 [中] ······ 霧 鷗 生

秋の自然 ······ 丸 山 晚 霞

水彩畫を修むるの基礎 [下] ······ 大 下 藤 次 郎

文部省美術展覽會水彩畫評 ······ 晚 霞 汀 鷗

甲州駒ヶ嶽(水彩畫石版) ······ 大 下 藤 次 郎

ピーター・デ・ウイント [二] ······ 青 人

大阪より ······ 鈴 木 雪 哉

小樽より ······ 鈴 木 登

寄書 ······ 問答 ······ 新刊評 ······ 時事 ······ 讀者の領分 ······

寫眞版數葉

△口繪『チームス河』 ······ 田中寫眞製版所

△甲州駒ヶ嶽 ······ 山田石版所

△寫眞綱目版 ······ 秀英舎第一工場

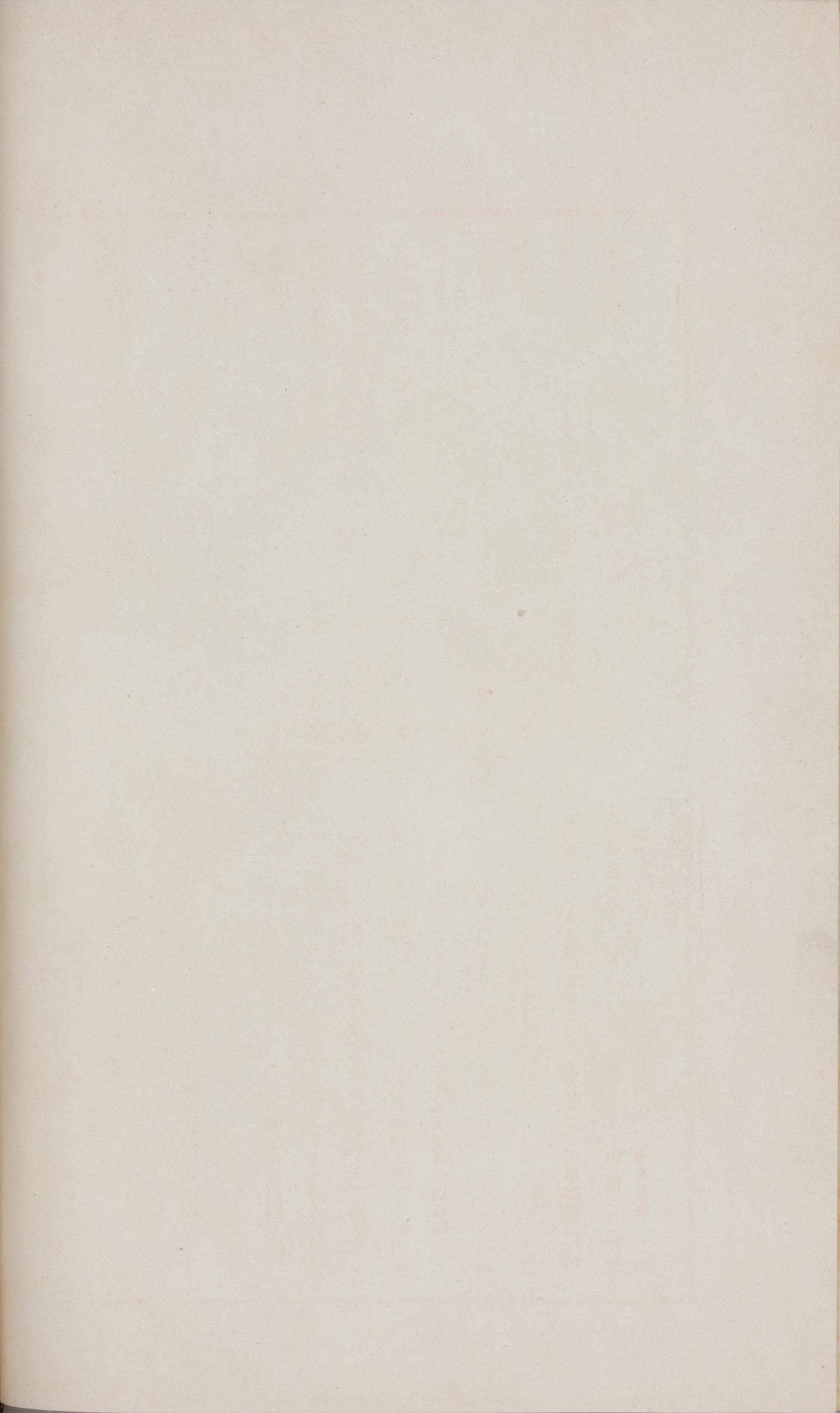
○故郷の秋(水彩畫原色版) ······ 丸山晚霞 ○水彩畫を修むるの基礎 [中] ······ 大下藤次郎 ○水 ······ 霧鷗生 ○瀧溫泉水彩畫講習會々員(寫眞版) ○白馬會展覽會水彩畫評 ······ 拍亭、無涯、晚霞、○ピーター・デ・ウイント ······ 青人 ○淺間の裾 [下] ······ 汀鷗 ○秋の夕陽(水彩畫石版) 大下藤次郎 ○瀧溫泉水彩畫講習會 ······ 丸山晚霞 ○遠州より ······ 畑川生 ○繪葉書競技會記事 ······ ○中等教員受験者の爲めに ······ 紫生 ○寄書其他數項











## みづゑ 第三十一 要目

前號要目

チームス河(水彩畫原色版).....PFTER.  
DE. WINT.

DE. WINT.

水〔中〕.....霧鷗生

秋の自然.....丸山晚霞

水彩畫を修むるの基礎〔下〕.....大下藤次郎

文部省美術展覽會水彩畫評.....晚霞、汀鷗

甲州駒ヶ嶽(水彩畫石版).....大下藤次郎

ピーター・デ・ウイント〔二〕.....青人

大阪より.....鈴木雪哉

小樽より.....鈴木登

寄書.....問答.....新刊評.....時事.....讀者の領分.....

寫眞版數葉

△口繪『チームス河』.....田中寫眞製版所

△甲州駒ヶ嶽.....山田石版所

△寫眞綱目版.....秀英舎第一工場

○故郷の秋(水彩畫原色版).....丸山晚霞○水彩畫を修むるの基礎〔中〕.....大下藤次郎○水.....霧鷗生○湯溫泉水彩畫講習會々員(寫眞版)○白馬會展覽會水彩畫評.....拍亭、無涯、晚霞、○ピーター・デ・ウイント.....青人○淺間の裾〔下〕.....汀鷗○秋の夕陽(水彩畫石版)大下藤次郎○

滋溫泉水彩畫講習會.....丸山晚霞○遠州より.....畔川生

○繪葉書競技會記事.....○中等教員受驗者の爲めに.....

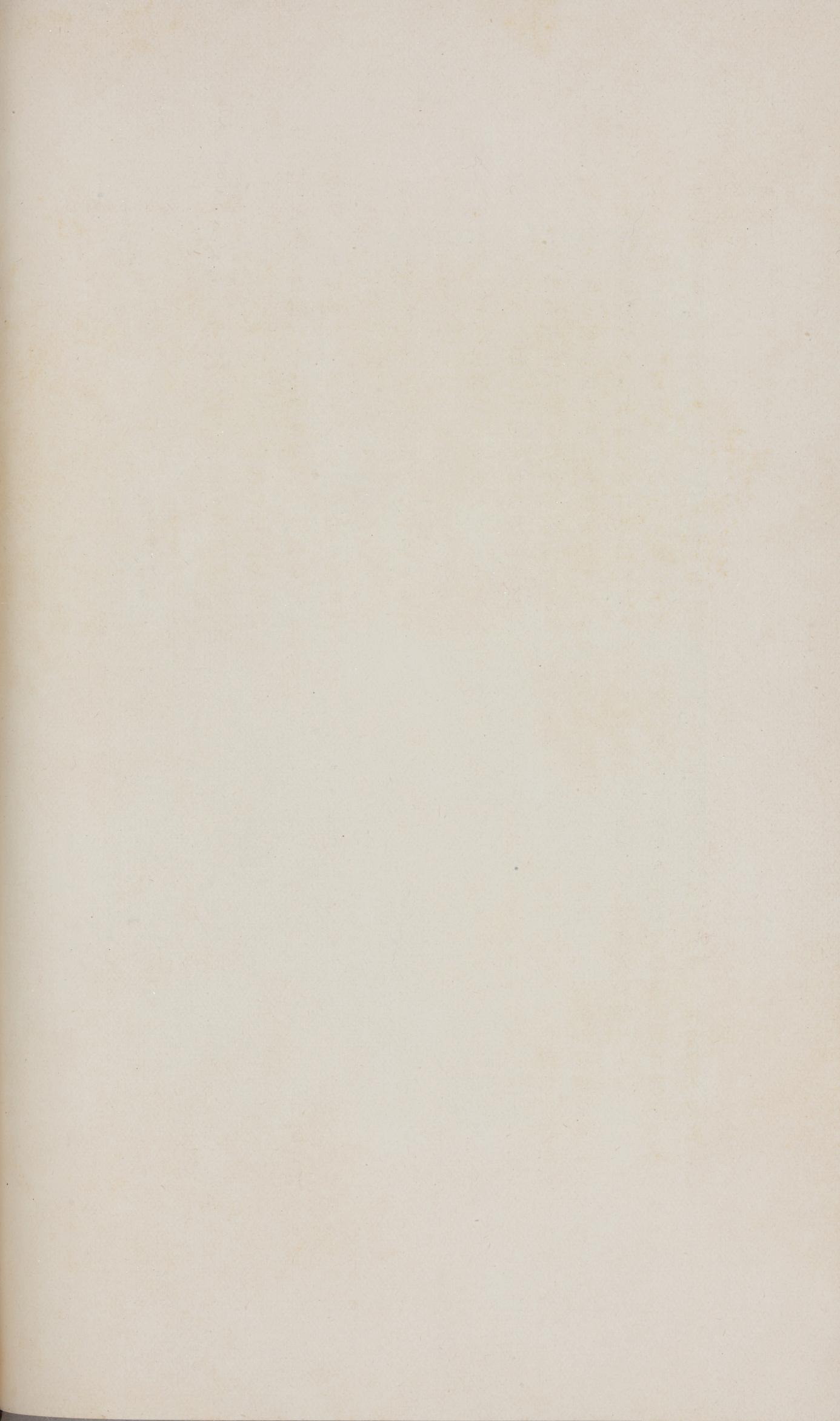
紫生○寄書其他數項











みづゑ

第三十一

明治四十年十二月三日發行

水〔中〕

(ラスキン氏近世畫家の一節)

位置が遠距離ならば、暗い物體が分明に影を映すけれど水の色は認められない。近い所の水面では、水の色が映つる暗い影の色を變らせる、併し明かるきものをば影響せずに残して置く、こゝに無限の興味があるのだ。

例として自分のヴエニス紀行の一節を掲げやう。

五月十七日午後四時

東方を眺めると水穩かで空と船とを映してゐる、薄青い空は水面では少し濃く見えた、されど黒色の船體は黒く映らずに蒼白い海の綠色に見える、即ち日に照られた水のローカルカラーに見えてゐる。  
しかるに前日頃かに降つた雨で濕ふて橙色に見える檣はそんなに能くうつらない。舷側に白や赤の條線が通つてある船も居たがその條線などは映つてゐない。それに不思議なのは白、黒の紋様のある小船が來たが、黒い紋様の映つた所の水は綠色に見えて白の所は少しも映つて見えない事である。  
波止場近くに吊してある小舟はうれしくする海面に顯然と倒影を生じてゐる、これは蔭となつた部分の水の反射の力が殖えた爲であらうと思ふ、何故といふに漣波の向ふ側には空の深青色を呈してゐるが、近い所になると段々と暗さが増して薄い綠となる、極近くの波では綠よりもやゝ暗いかと思はるゝ程の灰色の雲を映してゐる。

霧　鷗　生

清澄な水には蔭影はない、反射鏡の完全なものも影がない、空氣の様に透明なものも影はない。其れと同様に、水も光線を透過するも反射するも影はないのである。しかし他の物の蔭影は明かに水上に現はれる、これが水を描くときの誤謬の重な原因となる。

日蔭の水は日なたの水よりも反射することが強い。日光に照らされてゐる水のローラーは生きくしてゐて、凡ての映つるもののが深みを減少する。日蔭の水は反射力が數段増加する、されば水面より上にある物體の蔭影でなく物體其の儘の倒影を水面に生ずることのあるのは殆んど普通である。

フローレンスのアルノ河の様に水の濁つて居る河は、日の照つてゐる間は、河水の黃色の爲めに映つるもののが色調を更へたり、弱めたりするが、朝夕は、反射する力が強くなるからカリララの連峯が河面に映りて明かに見えることは清澄な湖上に見るのと同じである。

水のローラーは比較的に暗い映像をそのまゝ受けないが、輝いて居るものならば其の光澤等を減らさずに映す。

一群の樹立の下に澄み切つた清池があつて、水面には樹の間に見ゆる空までを映して居る、水には幾分色あるものとして思へ、そうすると水邊近くでは木の影が顯然と水底に落ちて居ると、水自身も透過した光線の爲めに本來の色に見える、段々離れ行くと底は見えなくなつてくるが、明かるい所よりも暗い所の方が遠くても底を見ることが出来る、併し遂には何所でも見えなくなつて水面のが青空を能く映すが、暗い木をば不完全に映す、そして水色が見える様になる。

蔭影が暗い倒影の上に落つるときは能くわかるが、空を映した所へ落ちると消えて見えなくなる。ひどく濁つた水上にうつる蔭影は、日中に地面にうつる様につよく出来る。

水を描くに當つて見える色が水の色であると思ふは間違であつて、多くの事情が水の色に影響するのである。

## 秋の自然

丸山 晚霞

四季のうちにて、心氣爽かにして壯快を覺えるのは秋である、秋の季といふと、太陽曆にては七八九の月であるが、この七八は盛夏の炎熱で、九月は殘暑にてまだ暑く、秋と思はるゝのは十ーの月である。

百日紅の花銷びて森の蟬も聲を絶ち、朝寒の庭に紫苑の花咲むる頃、これからが秋である。空氣は透明して一點の汚濁も無く、凡てが洗ふた如く瀟洒淡麗である、これが秋の自然の生命である。然しながら秋にありても、晴曇雨時には霧又は霞も日もある、されどこれ等の趣は他の季のそれと異つた特殊がある、それが瀟洒淡麗である。先づ秋の自然を形態上より見ると、夏の繁茂して居る草木の圓味が少しく亂れたといふ位で大した相違が無い、秋の美と快感とを吾人に提供するものは色彩である、色彩を離れては秋の天地を藝術の上に現はす事はむづかしい、さらば秋を代表する色彩は何であるかといへば、無論黃であると答へればならぬ、然り黃は秋を代表する色である、秋の凡ての色彩には黃色を加味して居る、黃色は活氣に富める賑かな色である。

余は今秋霜葉を利根の河畔に探る可く旅行して、上州濾川町より沼田町に向つて出發した、行路秋深し、行手は子持山の南麓、上白井村を過ぐるときは午後一時頃であつた、連日の快晴にて風も無く、短かき日脚は西南に傾き、秋ながらも日蔭を選みたき程暖かつたのである。上白井村の新道は子持山麓を東西に横切りて、脚下は展けて人家を望み、利根川その間を迂曲して流れ、對岸の高原は赤城山の裾野である。上白井の新道を行くと、人家は山の面又は河畔に散點して、何れも常綠樹落葉樹さては竹林等に掩はれて居る、落葉樹皆霜葉を呈して黄紅赤を染め、常綠樹竹林等と交りて居る、其間に開けたる平地の黄なるは熟稻、黄綠なるは桑園、鮮綠は菜園である。路傍の柿は赤熟し、柑橘又黃熟して枝も裂けんばかりに垂下して居る。豆打ち落す音は近舎遠村より響き、雞犬の聲又これに和す。歌ふて女牛曳く農夫、家を鎖して皆野に働くものも

ある。覓引いたる家あり、そこには山茶花の籬めぐらして、黃菊白菊が咲て居る皆美はし。村端の畔に蹊踞て展望を寫生す。瞰下に五彩七彩の森ありて、四五舍の村そのうしろに見ゆ。利根河畔の斷崖は高く低く、或は展げて河原を現はすもの、深碧の水靜かに流れて居る。對岸の山村寺院も見ゆ。遠近より煙立ち昇りて、それが霞の如く村をこめ林をこめ、夕日はこゝを照して距離を明かに春の霞めるものゝ如し、されど秋の日和の霞めるものは、澄みたる空、霜葉の花と相俟ち、春とは全然趣きを異にして居る。賑かな山村、豊な山村とはこの間の趣きをいふたのであらふ。豊富な趣きを現はすものは、樹木と煙と流である、如何に人家多く田畠が多く、流があつて煙が立ち昇りても、樹木といふものが無いと豊富の趣きが無い、又實際樹木の無い處は豊富でない、殊に賑かな霜葉を點じた樹木の多い山村であるから、豊富な太平な氣があふれて居つた。

秋の美はしいのは霜葉ばかりで無い、凡ての植物は秋に豊熟するので、その熟した色が美しい、畠や田の色の變化多きは豊熟の美彩である。果實に至りても、柿の如きは赤熟して全村にあふれて居る處がある、これ等の美は歐米に見る事が出來ない、我國特有のものである、殊に赤き柿に調和するのは秋の夕日の直射である、如何にも暖かい色で、西日うけの柿村が散點して居る美は、紅葉よりも趣味が深いのである。柑橘等も深緑の中に黄金の珠玉かけたる如く美しい、これも秋の色である。

秋の自然界は皆成功の氣が満ちて居る、人が生れて學び、中年に活動して、成功り名遂げたときは秋である、自然の植物が春に生れて花咲き、夏は活興をして秋に豊かなる結實を遂ぐのも人世と少しも異ならぬい。

秋は草木が美彩を放つ外に美がある、それは菌類である、茸は兎に角、地面又は樹の枝幹を纏ふ苔である、それが新綠滴る如く、殊に麗はしいのは斷崖絶壁を染めるものと、人通り稀なる道路を彩るものである、深山にありて白鬚の如く樹枝より垂下する猿麻<sup>サルオガセ</sup>持等の發育するのもこのときである。

秋の花は皆鮮美で、古來七草を以て代表して居るが、これ等は初秋のもので、深秋に開くものでは、野にあり

て野菊(黃白二種あり白は稍紫がゝりて單瓣且つ大)芒である、黃がゝりし原野を更に黃金を點ずるは野菊である、斷崖又は河畔の岩石等に垂下して咲くは白野菊で、何れも晚秋の自然を飾つて居る。高原に波打てる芒は等しく花なれど特殊の趣きがある、芒は七草に配し、又は近く見し二三株を描きて日本畫の品題として古來描て居るが、芒の面白味あるは長く引いたる裾野、又は長き堤等に群がりて、風に動きて夕日にきらめく等、又は百千萬のものが直立して開て居るも趣味がある、又少し亂れた芒を前景として夕月を配したものもよい、芒に満月は昔からの畫料であるが、芒の穂や葉の少しく垂れて曲狀をなしたものは、満月とよく調和するのである、又薄のみでは單調になり易いのであるから遠山、森、流、雲等を配した方がよい、芒原に順禮者駄馬等もよく調和するのである。日本の秋は至る處の山野に芒を充して居る、これも歐米に見る事の出來ない日本特有の風物である、芒は純日本趣味のものである、芒は又凡てのものに調和して、色を除きて秋といふものを現はすには、芒等は好材料で、これも秋の代表者である。芒の單調に色を添ゆるは、草紅葉ツルモドキ リンダウ等が面白い。

秋の生物にありては、歲々その頃渡來する小鳥である、(色鳥といふ)コガラ ヤマガラ シジウカラ キクイタバキ ツグミ アトリ レンジヤク マツガラ等にて、秋の麗はしい色彩をこれ等の小鳥はもつて居る、そして其の聲も爽かで秋らしいのである。昆蟲等も秋草の花全盛のときは、その種類も頗る多く、昆蟲の標本採集には、淺間の高原等がよいとの事である、これ等の昆蟲も皆秋の美しい色を持つて居る、蟲の音にても初秋に鳴くものは稍暑苦しい聲であるが、鈴蟲、松蟲、蟬等の聲は爽かに澄み渡つた音で、如何にも秋らしいのである。

秋と春との氣候が似たる處はあるが實は大に相異して居る、今表を作れば

春

自然美の趣は午前にあり

秋

自然美の趣きは午後にあり

殊に日出が美はしい

春は優美のものが多し

春雨は睡氣を催す

春は女性的

春は霞む  
春の暁は暖かし

春の色は濁りて淡黃淡青淡紅

春の月はなまめきておぼろ多し

春の水はぬるく

春の空は低く

春は病者多く

春の音は低調

春の花は柔かくして小

右の如く春と秋の趣きは異つて居る。それから秋は寂しきものであるといふが、春の陽氣なるに比較する

と春よりは淋しいのであらふが、秋を觀察した感に於ては前に述べた如く、秋程賑はしく又豊富の氣の満ちた季は他にあるまいと思ふ、秋の寂淋味を感じるのは霜地に充ちた晚秋で、風は木の葉を落し、山野は枯萎みて薦色を呈し、刈田の黒き田の面に水鳥啼き、採り残されし柿の梢に一とつ二たつ残れるのとき、これからが淋しき秋である、鳴立つ澤の秋の夕暮もこのときであらふ、花と見又錦と見たる霜葉は日に日に落葉して、圓味を持ちし森も林も角ばかりて瘦せ、骨のみ殘る枝幹は如何にも淋しい形態である、色彩豊富にして瀟洒なる自然界は忽ち灰色と薦色に變し、夕日の村に白壁のみ輝き、庭の菊も亂れ山茶花も色銷びては誰かは晚秋の寂寥を感じには居られまい、晚秋は淋しきものである、この淋しき自然を主觀すれば、悲哀の概念は頭腦に宿る、淋しき秋の消極美的詩の句も畫題もこのときに生るゝであらふ、秋の淋しきは晚秋より初冬に涉るときである。(了)

殊に夕陽が美はしい

秋は壯美のものが多し

秋雨は睡氣を覺ます

秋は男性的

秋の暁は冷たし  
秋の音は高調

秋の色は澄みて鮮黃鮮青鮮紅

秋の月は壯にして明晴

秋の水はつめたし

秋の空は高し

秋は病者少し

秋の花は堅くして小

## 水彩畫を修むるの基礎

〔下〕

大 下 藤 次 郎

(大阪に於ける講話の一節)

△水彩畫を學ぶには、前に述べたやうに、鉛筆畫で形を正確に寫すことを習ひ、一色畫で明暗、濃淡の調子を明らかに現はすこととを習へばよいのであるが、其形を寫し濃淡を現はすにも、矢張り學ぶべき順序があつて、それを踏まぬと進歩が遅い。

△一本の線を引くのと、一つの圓を描くとでは、其難易は同目の比でない、西洋畫の教へ方は、誰でも出来るやうに圓を描くにも直線から造つてゆく、即ち四角を作り八角にし十六角にし三十二角にし終に圓にするといふやうに、花でも器物でも皆直線を以て輪廓を作つてゆく。

△鉛筆畫で形を學ふのも此順序でよい、直線なる單純なものから始め、曲線の複雑なものといふ風に寫生し研究してゆくのである。

△濃淡の調子も同じ事である、初めは明るい處と暗い處の尤も明かに見ゆるものから學んで、順次中色の複雑な反映反射などのある物體に及ぼしてゆくのである。

△色彩に移つても同様である、原色に近い鮮やかな面倒のない色のものから寫し習つて、次第に調合の困難な色のものを寫してゆくのである。

△戸外寫生の初めも矢張り靜物からかゝらねばならぬ、初めから動くものや影の變るものは畫くとが出来ぬ、道端の石一個にも巧妙なる色彩がある、先づその石一つを満足に描き出す工風が肝要である、平凡なる一株の樹根も大畫家の筆によつて再現せらるゝ時は立派なる美術品となるのである、初學の人には部分研究は尤も必要である。

△多くの人は繪を學ぶといふ、繪を研究するといふ、然れ共其態度は決して研究的ではなくて、いつも製作

に從事してゐるのである、樹木なり山なり研究して、一枚の寫生をなせば、何等か得る處がなければならぬ、研究の爲めには、其繪が眞黒にならうが醜くならうが構ふ事はない、自己の信する點に向つて飽迄忠實に描かねばならぬ、白いワツトマンは何十枚も犠牲にせねばならぬ。

△此考を以て寫生してゐる人は殆どないやうである、折角旨く出來たのだから、アーチ見えるがこれは止めやうといふやうな風で、大膽に着色する事をせぬ、出來榮を氣にして、寫生畫を以て友人に誇る材料にしてゐるのである、後ろに立つ人達に下手だと見られまいと思つたり、上手に描いて驚かしてやらうと思ふ様な考いで繪をかくのは研究でも稽古でもない、こんな態度ではいつ迄やつても進歩すべき者ではない。

△要するに寫生する時は、將來立派な繪をかく爲めの稽古をするのであるといふとを忘れずに、飽迄熱心

に、眞面目に、正直に、大膽に、研究的に筆を執るべきものである。

△水彩畫(墨繪も同様)にて物を寫すに一定の描法はない、杉を畫くには斯くせば一番よく感じが現はれるといふやうなとは云へるが、必ずしも其通りにせねば杉が描けぬといふのではない、描法は自然が教へてくれる、自然の觀察さへ充分なれば、其描法は自から會得するのである。

△繪を學ぶといふ大道があるとすると、日本畫には形式といふものがあり流派といふものもあつて、是非其大道のうち、右の隅を歩べといふ、或一派は必ず左を通れといふ、そのやうに人爲的に極めて仕舞ふが、西洋畫を學ぶには、其大道のうちでさへあれば右でも左でも中央でも何處でも通つて差支ない。

△たゞ其大道を逸して横道へ入ることは慎まねばならぬ、形も満足にとれぬうちに水彩畫をやつて見たり、石一つ描くとの出來ぬうちから大風景を寫さんと試みたりするのは、取も直さず横道へ入つたものである。

△繪を學ぶ人はその基礎たる研究を怠らず、この大道を眞直に歩みてゆきさへすれば、早晚目的地に到着する事は請合である。(完)



に從事してゐるのである、樹木なり山なり研究して、一枚の寫生をなせば、何等か得る處がなければならぬ、研究の爲めには、其繪が眞黒にならうが醜くならうが構ふ事はない、自己の信する點に向つて飽迄忠實に描かねばならぬ、白いワットマンは何十枚も犠牲にせねばならぬ。

△此考を以て寫生してゐる人は殆どないやうである、折角旨く出來たのだから、ア一見えるがこれは止めやうといふやうな風で、大膽に着色する事をせぬ、出來榮を氣にして、寫生畫を以て友人に誇る材料にしてゐるのである、後ろに立つ人達に下手だと見られまいと思つたり、上手に描いて驚かしてやらうと思ふ様な考いで繪をかくのは研究でも稽古でもない、こんな態度ではいつ迄やつても進歩すべき者ではない。

△要するに寫生する時は、將來立派な繪をかく爲めの稽古をするのであるといふとを忘れずに、飽迄熱心

に、眞面目に、正直に、大膽に、研究的に筆を執るべきものである。

△水彩畫(墨繪も同様)にて物を寫すに一定の描法はない、杉を畫くには斯くせば一番よく感じが現はれるといふやうなとは云へるが、必ずしも其通りにせれば杉が描けぬといふのではない、描法は自然が教へてくれる、自然の觀察さへ充分なれば、其描法は自から會得するのである。

△繪を學ぶといふ大道があるとすると、日本畫には形式といふものがあり、流派といふものもあつて、是非其大道のうち右の隅を歩べといふ、或一派は必ず左を通れといふ、そのやうに人爲的に極めて仕舞ふが、西洋畫を學ぶには、其大道のうちでさへあれば右ても左ても中央でも何處でも通つて差支ない。

△たゞ其大道を逸して横道へ入ることは慎まればならぬ、形も満足にとれぬうちに水彩畫をやつて見たり、石一つ描くとの出來ぬうちから大風景を寫さんと試みたりするのは、取も直さず横道へ入つたものである。

△繪を學ぶ人はその基礎たる研究を怠らず、この大道を眞直に歩みてゆきさへすれば、早晚目的地に到着する事は請合である。(完)





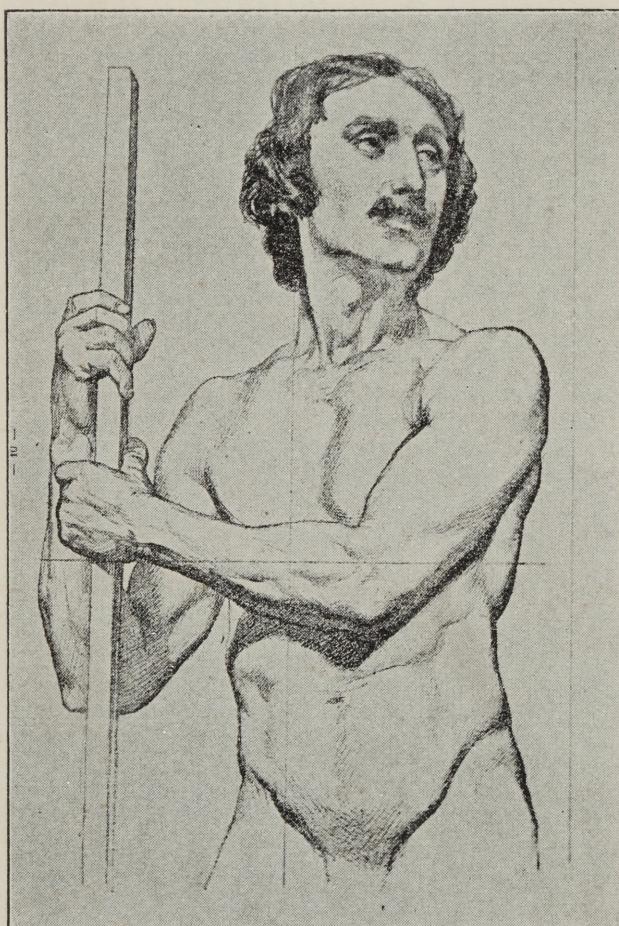
## 文部省美術展覽會水彩畫批評

晚霞、汀鷗

うが、今少し物質を見せて貰いたい、但雨あがりとしての感じ  
は見えぬ事もない（鷗）

### 五 奈良の杉（三宅克己氏）半切横繪

同氏の出品中での佳作であらう、調子も割合に整つてゐるがイ  
クラか右の方が勝つてゐやう、添景の人物は少しく無理がある  
やうだ、杉の葉の物質が見えてゐないのは遺憾である（霞）



カツサツサンボウ筆臨本内氏

サプライムの感があつて、  
近頃批難の聲の高い版のや  
うだといふ其形式も幾分か  
少なく、他の諸作に比して  
比較的物質も見えてゐる、  
樹の蔭の左の方に強い黄色  
を點ぜられたのは少しく目  
障りに思はれた（鷗）

### 六 池畔の朝（安藤復藏氏）全紙横繪

一色畫のやうで色が乏しいが稍朝の趣を見る（鷗）

### 一〇 森の道（石川欽一郎氏）四ツ切縦繪

空の感じもよい、地面もこ  
れでよからう、只不感服な  
のは圖の主要の位置にある立木で、幹の周圍をボカしたのは丁  
度深山でサルオガセが附着してゐるやうに見える、そして其樹  
は既に枯死して、春になつても青芽を出すとは思はれぬ（霞）  
樹幹の色に生氣がなく、繪全體としてヨシラヘ過たやうに思は  
れる、そして地面が傾いて見へるのは慣用の描法のためであら

### 一五 多摩川の朝（中川八郎氏）全紙横繪

く（鷗）

陳列せられた、其内水彩畫  
は二十三點あつて、博覽會  
の時より數に於て少ないが  
質に於て大に優つてゐる、  
出品畫の概評は左の通りである

### 四 雨あがり（三宅克己氏）

#### ワットマン半切縦繪

空の感じもよい、地面もこ  
れでよからう、只不感服な

のは圖の主要の位置にある立木で、幹の周圍をボカしたのは丁  
度深山でサルオガセが附着してゐるやうに見える、そして其樹  
は既に枯死して、春になつても青芽を出すとは思はれぬ（霞）  
樹幹の色に生氣がなく、繪全體としてヨシラヘ過たやうに思は  
れる、そして地面が傾いて見へるのは慣用の描法のためであら

茫として要領を得ぬ處に此繪の味ひがあるのであらう、空が重過る嫌いがある。（霞）

朝の心持は見える、日本画と西洋画と調和されたらこのやうな風になるであらう、深さと厚味みに於て缺けてはゐるが、見た感じは甚だよい、空の色に一工風欲しい。（霞）

一六 紅葉の村（中川八郎氏）半切横繪

技巧に於ては確に群を抜いてゐるが、繪は作者の想像で出来たものと思はれる、諸處細工の跡が見えるは失敗で、印刷物のやうな感じがする。（霞）

圖様は古い、色彩は人を飽かしめはすまいか、殊に突當りの紅い葉に對するコバルトの影など、艷美に過ぎて多少の厭味がある、併し其手際の立派なことは敬服の外はない。（鷗）

一八 杉並木（三上知治氏）四ツ切縦繪

自然に接する趣きがあつて、小作なれど出品中、自眉であらう、初秋の感が充分現はれてゐる。（霞）

二〇 新月（吉田博氏）全紙縦繪

感じの深い繪である、前景に強味が欲しい。（霞）

上半、空の色は實によいと思つた、遠い村の邊の燈火の數が多くちとウルサイやうである、前景は今少く強く出した方が、一層この繪の價値を進めたらうと思ふ。（鷗）

二二 カーナツクの建跡（吉田ふじを女史）半切縦繪

熱帶地の繪としては調子が低いやうに思ふが、實地を知らねば

何共言へぬ、たゞ少しく強烈の感があつてもよいやうに思ふのである、繪と額縁との調子がそれぬ爲め、此繪は大なる損害を受けてゐるやうに見える。（鷗）

二三 奈良の茶店（吉田ふじを女史）半切縦繪

美しい繪である（霞）

杉を少しく忠實に

寫して欲しい、鹿

を除いたら奈良といふ空氣が見えぬ

やうに思ふ。（鷗）

二四 蓮池（吉田

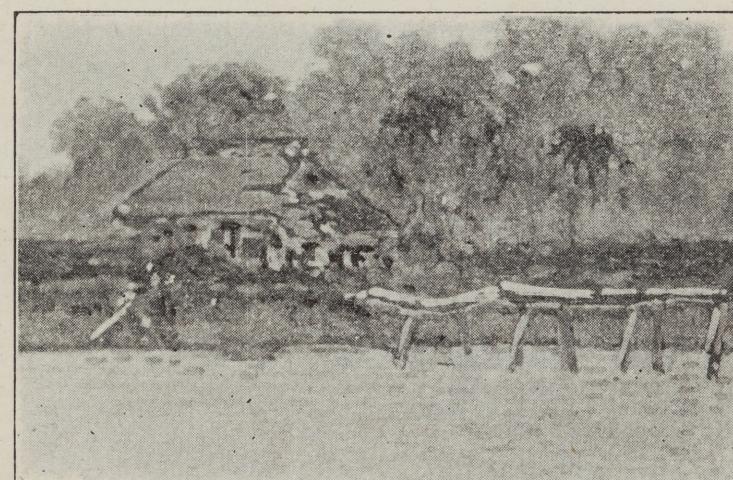
ふじを女史）四

ツ切横繪

色彩は鮮やかである、深味が欲しい、そして物の遠近を見せて貰いたい。（霞）

三八 夏の朝（長

谷川曾一氏）四ツ切横繪



(シツワグ) 筆 次 藤 下 大

ふじを女史）四

ツ切横繪

色彩は鮮やかである、深味が欲しい、そして物の遠近を見せて貰いたい。（霞）

熱色で出來てゐて、森と道路との關係が面白いと思ふ。（霞）力のある繪であるが、色が單純であつてたゞ是丈けのもので繪

に餘韻が乏しい (鷗)

四五 たそがれ (大橋正堯氏) 半切横繪

心持のよい調子で、水の光つた邊が面白いと思つた、但水の流れ  
てゐる活動が見えぬ (霞)

木の綠色が重く思はれる、前景の右は少し目立つやうだ (鷗)

中心を明るくしたのも態とらしく、色が重くして私には朝といふ感じが見えない (鷗)

五四 駿雨 (安藤復藏氏) 八ツ切横繪

信州の感がよく現はれてゐる、色の暗く沈んだ處が特色である、  
遠景は尤もよいと思ふ (霞)

描法明快にして甚だ氣に入つた繪だ、花々しい色もなく態  
とらしい細工もなく、質實なうちに力がある、繪が少しも  
浮ついてゐない (鷗)

六二 日光山の奥 (織田一麿氏) 全紙横繪

寫生してない繪といふことは一目して判る、奥山といふ色彩が現はれてゐない、樹の説明も不充分である、此繪から技巧を除いたら、何等の人を動かす處はあるまい (霞)  
取材は大なる景であるから、此大幅を充たすに適してゐるが、描法がそれに添はぬ、筆者の用意が甚だ粗末で、眞面目を缺き、一二時間のスケッチを見るやうな結果になつたのは惜しむべきではないか、私は作者の自重を望まざるを得ない (鷗)

五二 仲秋 (間部時雄氏) 四ツ切横繪

京都式で色が單調であるが、手際もよく、秋の感も粗は出てゐる、佳作のうちにに入るべきであらう (鷗)

五三 朝やけ (三宅克己氏) 四ツ切縦繪

一色繪のやうであるが、稍朝の心持は出てゐる (霞)



六三 薮の眞畫 (細井未明氏) 四ツ切横繪

七〇 出町の冬 (加藤源之助氏) 四切横繪

七一 風景 (平木政次氏筆) 四ツ切横繪

眞面目なスケッチとして見るべく、色の寒いのと調子の硬いの  
とは此繪の缺點である (鷗)

## 八〇 實り（大橋正堯氏）半切横繪

發色はよいが、前の樹の枝は態とらしく、中景の山は青が勝過てゐるやうである、そして田の色と調和しない、何となく雅味の乏しい繪である。（霞）

觀察が粗く、何處となく調和がわるく、氏にしては失敗の作であらう、田の現はし方も、中景の山も、其寫し方に熟さぬ點が見える、繪全體から見ると、短時間に急いて仕上げたといふ趣があつて、研究の不充分を諸處に示してゐる。（鷗）

### 果物の美

林檎の色は黃綠、淡黃、紅、淡江、にして、この美は近く見るにあり其他桃、梅、梨、杏、李、皆美、これ等は木に着いてゐるものよりは、各種を集めて籠に入れたもの、又は配置したものゝ方が畫として面白い、殊に畫として妙味あるは果物店、果物市場等である、これ等を寫生するには、果物の形及其色の配合を調べて光線を作り、描く上に於ては少しも人意を加えぬ様にする。果物は四季を通じてあるものだから、其期のものを選むがよい、果實は初學の者の研究には、花と同じくモデルの好材料である（丸山晚霞氏、女性と趣味）

\* \* \* \* \*

## ピーター、デ、ウイント [二]

青 人

ピーターの父ヘンレー、デ、ウイントが此の結婚は一七七三年に父よりの故障にて思止まるところはなんぬ。其後に結婚しけるは米國富豪の従妹なりき。ヘンレーは妻あるを秘して親元に言遣らざりしかども、終に知る處となりて、其結婚を拒まれ、其上に勘當の身とはなりぬ。かく扶持放れとなりけるとき、既に二子ありしが、サウスウエールズにてカーディフの隣にて開業しぬ。されどこゝにも住み易からず、一七八一年にスタフオード、シヤイアのストーンにて獨立に開業したりける。こゝは遂には中位の成功なりき。ストーンにては十子を得て、ピーターは其第四子にて、地上に來れるは實に一七八四年二月二十一日なりき。

家族の口碑によれば、ピーターは幼時より小兒らしき處絶てなく、常に悪戯を好み、喜んで棒の棒を削り、これを鳴らすことを好みしとぞ。豎子獨り森あるは原野に入りて、樹木の發達を熟視し、或は鳥獸の習癖を研究しつゝありき。それより學校にあるときは、自身の慰の爲めに畫を描くのみならず、朋輩に寫生の方法を教へつゝありしとぞ。氏は幼時より、美術家たるの性行を持して、曾て此の初一念を破らざりき。氏は和蘭と蘇格土蘭人種の血を混えたる人なれば、頗る友誼的の愛らしき處はなかりしも、剛頑にして忍耐力に富め執拗なる性質を有しぬ。

氏が父は氏をして醫師たらしむべき希望なりしかば、ピーターは餘儀なくもこれを修むることにはなりしも、傍ら自己の好む處に志しぬ。其好む處とはいふまでもなく繪畫にて、スタツフオードのローガース(Rogers)氏に就く學べるなりき。實に氏が忍耐と機智とにて、醫學畫學共に進歩しける。

一八〇二年四月第一の金曜日にデ、

ウイントは倫敦にて畫學を修めたために故郷を辭しぬ。氏の兩親明友等はかかる幸運の日に開業せんことを一向に勧めけるも、早々に訣別の辭をひこして出て行きぬ。其後果して此四月第一金曜日が幸運の目にありしかば、祝日として氏は歡迎したる。氏が倫敦行の目的は銅版師のジヨシ・ラファイル、スミスの徒弟となるにありき。此の人はターナー、ギルチンの色印刷をなしたる人なりき。スミスは好畫家にて、遊戯好きなり。或批評家は氏がプライズリン



(天王寺) 大阪講習會員の一部

仕事を澤にし、銅版等は描いて顧みず、例之はスミスの親戚者の證言によれば、氏は一週間に墨筆の肖像を四十枚餘を描きて、それを一枚一ギニー位にて賣りしとぞ。何れも一時間餘のなぐり書きなれども六日に四十枚は容易の業ならざるなり。スミスは缺點の多き人なりしも、親切にて我儘ならず、常に門葉を助くる事に熱心なりしかば、自身に得たる金額をも各自に分配して吝まざりき。さればスミスは概していへば良師たりしなり。道徳堅固なるデ、ウイントも實にスミスが派手なる遣り方には少からず感化せられたらん如し。

スミス氏との契約書はコーグエントガーデン、キングストリートにて、スミス氏と共に同棲してより數週間の後、即ち一八〇二年六月七日に調印済となりぬ。通常の規定は年季七年なりしも、醫師デ、ウイントはその子に利子を仕拂ふ換りとして、更にダ(賭事也)鬪鶏等を好みしか喜ばざりき。氏は面白可笑しく酒に日を暮しぬ。たまゝ金錢の欠乏を告くるに至れば、一時に

一年を増すことなしぬ。これ一ビター、デ、ウイントが繪畫の教育を受けたる最初なりき。それより次の四年間は甚だ多忙に

て、パステルを描き、手に彫刻をし、又或時はスミス氏と共に釣魚に隨伴し、師が遊びつゝある間に、氏は寫生を爲すが如き有様なりき。氏は幸福なる方法にて勉強しぬ。そは同窓の友たる、同門葉たる未來のアカデミシアンのウイリアム。ヒルトン氏（其當時は僅に十六歳）と共に同伴せしが此の上なき樂なりける。

ヒルトンはデ、ウインントより二年後の後進なり  
き。内氣強ちに感情深きヒルトンはデ、ウイン  
トの猛犬的の決斷を嘆稱して措かざりき。又デ、  
ウイントもヒルトンの稱賛を喜んで聞き居た

美術史上に最も長き眞の友誼を傳へけるなり。

ヒルトンは徐々絶望の狂熱に陥りて云々

に自己を持して、正道を踏んで動せず、一度か

困難なる事の起りければ、師の許より逃亡せん

と決しぬ。これを新友に依頼して、リンゴルシ

ラファエル、スマスはその門葉の天才を失ひしかば、デ、ウインントに怠惰者のヒルトンの何處に逃走せるやを追窮しぬ。デ、ヴィントは再三親友の秘密を露洩せんことを拒みぬ。老父アンティツクの法律に對して、デウイントは頑迷なる門葉なりしかば、



松浦次郎郎筆 温泉

遂に獄中の人となりぬ。これに類せる話あり、  
兵師との間の争なりき。ギルチンの囚人となり  
レトの場合とは趣を異にして、あまりに不愉快  
其故はエセツクスの伯爵がギルチンを放釋し  
て、氏の約定書を買上げければなり。かゝる  
ことはピーターには起らざりき。ピーターは  
獨り囹圄の下に呻吟しぬ。此の事ヒルトンの  
耳に入りしかば、リンコルンより驅け付けて、  
氏を救出しける。其後スマスの心も解け、二  
人を宥免するに至りぬ。

法庭に曳かれて、遂に獄中の人となりぬ。これに類せる話あり、そはギルチンと其師との間の争なりき。ギルチンの囚人となりけるはデ、ウイントの場合とは趣を異にして、あまりに不愉快にてあらざりき。其故はエセツクスの伯爵がギルチンを放釋して、氏の約定書を買上げければなり。かゝることはピーターには起らざりき。ピーターは獨り囹圄の下に伸吟しぬ。此の事ヒルトンの耳に入りしかば、リンコーンより驅付けつ、氏を救出しける。其後スミスの心も解け、二人を宥免するに至りぬ。

二人共に師の許に歸りて仕事を續けつ。間もなく國內危急の秋に到りぬ。そはナポレオンが威風頂點に達して國土を席巻して、侵入威嚇しければなり。倫敦市中競々として騒かしく、國內諸方より義勇兵を募集するに至りぬ。ヒルトン、デ、ウイントも其義務を果さんが爲に徵募に應じぬ。而してセントマーティン及セントジョンの義勇兵大隊へと編入せられぬ。二人共に練兵を受け、銃の真直射撃を習得したりしや否やは、知る能はざれども、この義勇兵編入の事は二氏が性質を知るの利便として、こゝに特書すべきこと

## 大阪より

鈴木雪哉

拜啓本年の水彩畫夏期講習會は小生一生中の最好紀念日に候につき、炎暑燐くが如き大阪の夏は却へつて胸中の荊棘をやきはらひ、風格自ら塵外に向上せし折柄斯道の先覺大下大橋兩講師

(松原講師當時嚴父御逝去のため缺席)の懇篤精透なる御指導の下にみづゑの順序御教授に預り候段は返へすぐ難有仕合に奉存候。

往年東京美術學校にて學び候邦畫、此の奸き變化に遇ひ、大下講師の所謂鬼に金棒、又砲炮の武器先づ備はり、自然の畫趣人爲の妙趣を看取する自由を得候は、實に仕合千萬に御座候。

自然の畫趣に背戾して、師傳萬能、粉本萬能、筆勢賦彩萬能に満足し得々たる多くの邦畫家は氣の毒のものに御座候。兩講師の鐵鎚ば痛く小生の闇頭を打ちて明頭たらしめし音響今に繼續、餘韻嫋々人の話がよく分り、己れの非もよく分るやうに相成申候呵々。

兩講師の講生に臨まれし態度は如何にと申すに、誇張虛飾なく、純眞無雜、講話極めて平易淡如了解に苦まず、興味從つて湧き、雅趣懷に充ち、時の遷るを惜み申候、此處恐らく講生一同の深く感謝にたへぬ次第と愚考仕候。

講期は十六日間の短期に候へしが、研究は源泉に付、末流は如何に長く深大なる事を憶念仕候。

講期中(朝より夕に至る)一日の休日なし、講師も講生も勇戦猛

鬪、通身の流汗大雨の如く、地上六十の三脚を漂はし申候、痛快／＼斯く講師の空日なく、精勵職に當られたは恐縮敬候。傳へ聞く、當時兩講師未明起床、講生に接する前僅々の時間を善用して附近の寫生に餘念なかりしと、眞に懦夫をして起たしむべき隱約不言の教導と存候。

重れて小生の忘るべからざる事は、第一高等學校生金森君、韓國より遙々來會せし錦織君の如き、元氣天を衝く青衫英雄と同宿し、毎日おもしろくおかしく畫談に耽り、下宿の樓上爲めに夏なく、清風座に起り、何とも云ひしれぬ佳境に講期間を過し候ひつ、人世の愉快一端に御座候。

末紙駄句二三首、兩講師の御一笑に供へ申候 敬具

十一月十一日

雪 頤首

○煙草やめて

みづゑ稽古の

暑さかな

講師曰ふ、煙草の煙は繪の保存上に害がある

○煙草やめて

綠蔭に半

奇峯みる

講師曰ふ、畫家は畫に忠實であればよい、物慾を思ふやうでは駄目です

\*

\*

\*

\*

火中の栗を捨ふ射倅的態度を以て、午後の寫生地點なる地獄谷に出發した、溪流石に激して雪を噴き、岸を噬んで淵となり、或は駄せて矢の如き飛瀑となり壯たり絶たりの光景に配するに、蒸氣噴騰雷の如く轟き、天に冲して七色と映じ、神韻漂渺云ば大家が腕前を發揮するに適してゐる畫題である、自分は誤て是に手を着けた、變幻奇態到底凡筆に捉ふる事が出來ない、氣は焦つ、場所を變て尙一枚試みた、之も又無益であつた、人は見せられない、日脚は無遠慮に傾く、人は最早半仕上に塗り上げた、先生は落花流水と快意に筆を操縦するのである、自己の失意の時程人の偉らく見える時はない、先生は美神の權化と見えた、而して余は煩悶懷疑の奴となつた、溪流はあざける如く笑た。

宇宙に怪物あり、出て天外に漲り、かくれて一點の片影を止めず、月を曇せ又蕭々の雨となり、風に卷ては紛々の雪を降らす、人の感情も又頗る是に類する怪物である、其高潮時に在ては妙麗の繪畫となり、反対の潮流が來たとなると無惨のものである、余は此低氣壓に襲はれた新に疇昔一躍して青雲に入らんとしたのである、今想へば、僅かに美の輪廓繪畫の皮膜を解して居たのみである、是が中堅を衝くの實力は未してあつた、氣で繪畫を描かんとしたのである、縱横一筆拂千軍、先生の銳利なる態度に少少驚いた、通信教授中臨本の効力はあるに相違あるまいが、百聞一見に不如である、故障が在て來會する機會が無かつた

た、同好諸君に同情を寄せざるを得ないのである、臨本に由て研究の諸君、鮮やかな一彩を傳し得ざりし憾みはなかりし乎、今日始めて半日の講習に、余の活力は最低潮となつた、心意の機關は作用を害せられた、缺點ある機械は良好なる生産をなし能にざる事當然である、憂心沖々として爲めに長大息したのである。

第二日、早曉床を蹴て新しき天地を眺めた、金泥を蒔き散らしたが如き彩雲東天を繚繞し、清淨の心を以て此の自然に對し、美の神の接した如き感が在た、物を描くの最大要件は是の心機である、劣機下根なればこそ畫が描けないのであると快了してスケツチ箱に對して氣が澄まない、高價の繪具に對して猶更らである、人の手前が惡ろい、其くせ余のスケツチ箱は頗る「シヤイニング」である、今日こそはと紫溟に飛んで三脚を据た、悟は開ひたが何分手が冴ないのであつた。

第三日、諸藝共に寒稽古で苦むのが通常だが、余は反之暑稽古である、難義苦行一通りでない、可愛子には將來共遺言して畫の稽古は遣らせまいと思た、一時の趣味と思ひきや中々の苦痛になつた。

何んでも赤子天真の心情でなければ成功しない、天地人生の奥に脈持つ温かなる生命を促ふる事は出來ない、修養此處に到ると實相に觸る處鏗然として自ら聲をなし、色を織るのである、兎角平素は俗事に妨げられて繪三昧になることが出來なかつたが、此處數日は繪畫生命であるから一心不亂に學んだ、

第四日、漸く先生の寸鐵評語が身にしみた、兎に角に苦勞したのである、最初から講師にのみ依頼して、上手になるだらうと思つたのは誤りで、乳を飲む小兒は乳を飲むとを意識して後に飲むのである、いくら母が與へても飲むとを知らない小兒は成長しない、到底自助である、先生は進路を指示し研究の方法を誤らない様にするのである、吾人は精緻穩健の考を以て渢々として努めねばならない。

美術は絶體價値のものである、烈士義人の行爲も道徳の名に由て傳られてあるが、其實一種の美的である、道徳も醇粹生命あるものは美的活動に依て始めて得らるゝのである、其道に就くや烏の塘に歸るが如きに到るは、藝術を透して獨り得らるゝものではなかろうが、余は講習中自己の愚なるを知得たのである、誠に天の時を得地の利を得、而して人の和、又有りし講習會で在た、而して又趣味ある避暑法で、又練想の教育であつた、氣の毒なのは塵表閣の主人で、酒が少しも賣れなかつとこぼした。

(終)

## 小樽より

拜呈益々御清榮奉賀候、陳者去る八月中設立いたし候『白百合會』は、本月三日天長の佳節を卜して、小樽英和學校に第一回展覽會を開催いたし候、其折は小樽新聞記者松田竹嶋氏に依頼し、先生の御高作三葉拜借いたし難有御禮申上候、先生の御作は右の外藤野羊蹄氏所有の九つ切位の『川邊の夕暮』の圖有之

候、以上の四葉有之候爲め錦上に花を添へ誠に御見事の御作と奉存じ候、先生の御作の拜見いたし心に期し候は眞面目と忠實の一ことに候、あまり言多きはいたさず候らへ共、今後は不言の教に從ひ眞面目と忠實を旨と可致候。

白馬會會員田中寅三氏、高橋勝藏氏の水彩及び油繪、同じく白馬會々員にて美術學校生徒なる長谷川昇氏、小樽中學圖畫教師關精一氏の油繪の出品有之候、其他會員の作品水彩、油繪、チヨーク、木炭畫等有之合計五十點計りに候、洋畫展覽會としては今回が始めに候爲め頗る盛會に御座候。

第二回は明年四月の筈に御座候、其折は第一回に増し盛會を期し申し候。

鈴木登

安中みづゑ會記事

三十 六 公

本會設立に就いて其の種蒔をされたのは根岸君で適度の溫熱とする吾々會員は兩氏の勞を決して忘れてはならない。滿山紅を染むる霜月二十七日は本會第一回の開會で有つた待ち焦れた丸山先生に接して居る間は僅かに數時間で有つたが其の得た知識は實に多大で有つた事を皆喜んで居る。斯く多大の結果を得たのは勿論講師の手腕によるのであるが又一つには會員の熱心と其の方法が良かつたからであらう。午前に作品批評と講話をされ

た午後は其の講話された事を野外に於て實地に筆を執つて示されたのである而かも其の書かれた場所は我が地方の景色に大概出て来て又其の應用の範圍の廣い材料が澤山有る所であつたから其の得たる所が多かつたのである。是迄の經驗に依るとどうしても専門家の肉筆を見たり模寫したりするより外に捷徑は無い様だ専門に研究する人でも先づ先輩の遺り方を一通り調べてそれから實地に當つてそれ以上の工夫をするのであらう吾々は娛樂の爲に繪を書くので研究などいふ資格がないのであるであらう吾々は何も書けない物を無理に書きたがるには及ばない先づ第一に大家の肉筆を見たり模寫したりして其の得た知識を以て描けるだけの物を描いて居れば充分樂みになるのである吾々は丸山河合兩先生が惜氣も無く神作を本會へ貸して下さるのを此の上も無く有り難い事に思ふ。吾々は初は講義錄體の物に由つて模寫したものであるが其の説明通りに繪具を交ぜてもどうしても其の色が出ないのであるそれからどうかしく度々大家の肉筆を見たり模寫したりする機會を得たいと心がけて居つたので有るが今は本會の設立に依つて其の大願が成就した譯である數里を遠しとせずして本會に加入された者も數名あるが大方講義錄などの價値の少い事を認めた方であらう

△ △ △  
この程少年世界で集めた現代作家幼時の記憶のうち、その最も好きであつた事」との間に對して「繪を畫くこと又は見ること」と答へられしは左の二十七氏である

伊藤銀月君、生田葵山君、萩野山之君、西村渚山君、大倉平三君、大町桂月君、大下藤次郎君、和田萬吉君、和田英作君、鎌田榮吉君、梶田半古君、横井時敬君、添田壽一君、坪井正五郎君、内藤鳴雪君、那珂通世君、中村不折君、佐々醒雪君、三宅雄二郎君、三宅克己君、水野繁太郎君、鹽井雨江君等

そして、「最も嫌いであつた事」の方に、算術や手習讀書などは澤山あるが、繪が嫌いであつたと答へた方は一人もない。また言ふまでもなく主筆の巖谷小波氏は幼年時代から繪は大好物であつた

墨繪や彩色畫の濃淡の調子を見るための『調子鏡』は、通常繪具屋にあるのは高價でありますから、私が修業の餘暇に造つたものを實費で頒ちます。御入用の方は、東京小石川區服部坂下日本水彩畫會内、C、M、生宛に御申越下さい

● 調子鏡、一個金十錢、小包送料金十錢  
(郵券代用差支なし)

## 寄書

落葉籠

凸  
坊

○或る一部分のみ見て寫生すると全體のつり合ひがとれぬから始終目を全體にそいて描くがよい例へば人物でも其目ばかり見て描くと大きくなり過たり小さすぎたりする

○何處でも同じ様ではいかぬ強い處や弱い處があつてこそ面白みも出來るので雷でも唯ごろごろといふばかりではいかぬピカピカと光るのやビシャと落ちる様なのもあつて初めて調子がとれる

○道路の兩側の線の如何に依つて其景の趣に大關係を及ぼす廣き原野の如き場合に其色彩の遠近にもよるが其彎曲せる道路の線とは相違がなくてはいかぬ例へば樹木の幹に當つた光線と平地を輝した光線の強弱の様なものだ（以上某先生評）

○早く寫生すると云ふ事は場合に依つては必要であるが自然を眞面目に寫生しようと思つたら中々そう着々とはいかぬ早く出来そうな筈がない、いくら寫生しても觀察が粗で苦しみがなかつたら進歩も何もない、兎角所謂チャランボランが出て来て困る

○何度寫生しても思はしく描けず一二週間

○嫌やになつたら直に止めて亦次の日にすれ、すると新らしい觀察や描法の上に於て大に得る處がある翌日實景と比較して見て悪いと感じた處は得心する迄補正する

○補正の爲に幾度も色を重ねたりいちつた

りすると色がにごるそとかと云ふて其儘で尚いかぬしいまくしいものだ一度色をぬつてぬれている間は再びさわることは大

禁物だかわく迄其儘にしておく多少色がわるいと思つても後からいくらも補正するこ

とが出来る

○道路の兩側の線の如何に依つて其景の趣に大關係を及ぼす廣き原野の如き場合に其色彩の遠近にもよるが其彎曲せる道路の線によりて遠くも見え案外近くも見えろ見取

るがそんな畫は有難くないと、局外者にされはだけの研究あり勿論こんなことは充分承知でいて實際はそうはいかぬらしい吾々は忠實に自然を研究して如斯誤きなき様に心掛くべきであるまいか

## 余の水彩畫に志せし動機 及び其の経過

三脚道人

○草を描く場合に其蔭の描き様に依つて草の長短が現れる筆を大きく使へば長く見へ

三宅克己先生筆水彩畫須磨の元旦を見たのが、其の動機でありました。

は寫生の事とも思はぬときには水彩畫階梯やみづゑ等を讀むと亦急に寫生に行きたくな

る、寫生して歸つたら畫を取り出して自分

で遠近、色彩、輪廓、明暗、等よくく公平な

目で見る全體が寒いとか遠近が現れぬとか云ふことは毎度ある、そしたら出来るだけ

補正すると大に悟ることがあるだろ

○或る人の談話中の一節に吾々の服膺すべ

き金言があつたそれは果物など寫生したる

畫に其實は熟した色を呈しながら葉は未熟

のときの色をしてゐるなどを往々見受け

るがそんな畫は有難くないと、局外者にさ

へはだけの研究あり勿論こんなことは充分

承知でいて實際はそうはいかぬらしい吾々

は忠實に自然を研究して如斯誤きなき様に心掛くべきであるまいか

自分は、性來繪畫が好きでありましたから、雜誌に、コマ畫が挿入されたり、口繪に鉛筆畫や、セピア畫等が、出て居るのを見ます毎に、何んとかして、自分も此様な畫が書きたいものであると、憧憬れて居ながら、繪筆を取る時機がありませんでした。處が、中學世界の口繪水彩畫須磨の元旦を見ました時に、あゝ、立派な畫だ、實に美くしいものだ、自分も如何かして、此様な水彩畫を描きたいものだと思ひましたが、然し最初から物體の形狀の描けぬ者が、繪具の調合も知らぬ者が、如何うして、此様な立派なものが描け様はづはないからと思ひましたから、私は物體の形狀を描く練習として、直ちに鉛筆畫を始めました。其時丁度同雜誌に岡田先生の鉛筆畫の手本がありましたから、夫を參考として、一冊のスケツチブツクをも買ひまして、見るもの、何んでも彼んでも鉛筆寫生を爲たり。又臨本により手習も致しました。處が妙なもので、追々形が出来て参りましたので、大に自慢してやろうと、一日友人のN.Y.君の宅へスケツチブツクを持つて行きまして、見せました

處が、友人は、自分は、水彩畫を描いて居ると云つて一枚の水彩畫を見せて呉れました。其時、自分の眼には、友人の畫が立派に見えたので、鉛筆畫を止めて、水彩畫を始めました。初め様かと思ひましたが、待て々々と夫から友人と相談して、土曜日や、日曜日毎に、自分は矢張り鉛筆畫を、友人は水彩畫の野外寫生を致しました。

處が友人の水彩畫が段々上手になりますのを見るに付け、羨やましくてたまりませんし、自分の鉛筆畫は、未だみじくですが、何んだか、一色の墨繪では自分の心が満足せぬ様になりましたので、遂う／＼、私は明治三十九年十一月二十三日友人Y.T.君と丹生大師へ遠足を致しました時に、友人のT.S.君に繪具と繪筆とを借りまして、鶴田川と丹生大師とを水彩畫で寫生致しましたのが、抑々自分が水彩畫を描きました初め

すると、下手ながらにも、水彩畫を描きましたのが、自分は非常に愉快に感じまして、歸宅早々七十五錢の佛國製の繪具と、日本製の繪筆とを買ひ求めまして、暇があれば、

野外寫生に出て、臨本により習畫を致しまして、友人のN.Y.君に大に對抗致しました。先に鉛筆畫に熱中致しました自分は、水彩畫に熱中する様になりました。其後三宅先生の水彩畫手引や、大下先生の水彩畫階梯を読みまして其の道の事を研究致しますと、水彩畫を描くには墨畫から始めればならぬと云ふ事が説かれてあります。それを読みました時、自分は期せずして、水彩畫を初める最初に鉛筆畫を始めましたのが、何時の間にやら水筒の代用とした壇が眞の水筒と變じ、三脚椅子に腰をすえる様になり、畫囊も買うと云ふ様な譯です、難久に此偉大なる美術によつて、己の心膽をれり、人格を養成しやうと覺悟して居る次第であります。(完)

日本水彩畫會研究所

安中支部(群馬縣安中根岸方)

横濱支部(神奈川縣土佐ヶ谷町小學校内)

■ ■ ■

□ 繪畫及寄書の類其他雑誌『みづゑ』に關す

る事は、一切春鳥會宛にて御送り下された  
べく候

□ 日本水彩畫會々友の作品及質問等は、一  
切大下藤次郎氏宛に御送り下されたく候

□ 本號の口繪は石版に附する筈なりしも、  
印刷の結果不良につき原色版に致候

□ 前號募集の中繪の寄稿に傑出せしもの少  
なし、一層御奮勵を望み申候

□ 一月號の口繪は、大下氏筆甲州日野春よ  
り見たる富士の圖を出すべく候

□ 講話には丸山晩霞氏の松の美觀、挿繪專  
門家戸張孤雁氏のイラストレーシヨン、大  
下藤次郎氏の靜物畫の話等重なるものに候

### 近事雜聞

△長野市に於ける洋畫同好者の組織せる信  
美會は、其第二回展覽會を十月二十日同市  
に於て開會、日本水彩畫會幹部の人々の出

品もあつて頗る盛會なりしといふ  
△小樽にては、十一月三日同じく洋畫展覽  
會を催したりといふ

△文部省第一回美術展覽會は、十一月三十

日閉會したり

△日本水彩畫會研究所は既に六十有余名の  
研究生を有し、去月二十四日の例會には成  
績多數出陳せられ、極めて盛會なりし

△太平洋畫會にては十一月十二日二泊がけ  
にて入間川方面に秋季寫生會を催したり

### 評

◎ 東京四大通 東京通人著

菊判半載クロース本綴二五〇頁六十五錢  
京橋木挽町 也奈義書房

東京案内の一冊にして遊覽、食物、買物、  
旅館等に分ち、何れも精細なる探究を経た  
るもの、地方人は勿論、東京人にも一本  
を有する時は至極重寶なるべし。文章明快  
奇抜にして面白く、小杉未醒氏の約五十頁  
の挿繪は例の通り奇想天來木文と相俟つて  
東京の通を穿つと切實なり。

○ 演藝は新に生れたる好雜誌にして廣く藝  
界一般に涉り材料極めて豊富なり、但挿入  
のコマ繪は感服せず(毎月十五日發行、十八  
錢、日本橋通四丁目斯文堂書房)

の銅像彫刻」あり◎文庫第三十五卷第四號

には小島烏水氏の「秋の自然美觀」あり◎中  
學世界十一月號には青木繁氏の「グワツシ  
の話」あり◎日本美術十月號には三好梧一  
氏の「建築美について」あり十一月號には紀  
淑雄氏の「職業としての繪畫」あり

◎ 十一月一日初號を出せし青年の友は、羽  
仁吉一、松岡正男兩氏の編輯に成れる質素

なる雜誌にして、現代青年の意嚮滔々とし  
て物質的方面に趣くな慨し、金錢上の富の  
成功以外、人間としての事業あるとを熱心  
に鼓吹せり。吾人が水彩畫の趣味を普及せ  
しめんとするも、又此意に外ならず。吾人  
は爰に本誌の發行を祝し、同時に『みづゑ』  
讀者に向つて本誌を愛讀せられんとを勧む  
(毎月一回、六錢、小石川小日向台町三丁目  
愛友社發行)

## 問に答ふ

注 水彩畫に關係あるものに限る。印は答。  
一般に對し利益なきものは載せず。

■私は將來水彩畫を以て世に立たんと思ひ居候が美術學校へ入るのと研究所へ入るのと何れがよろしきや、又油繪と水彩と何れか趣味多きや(文學博士)○水彩畫専門家にならぬなら勿論日本水彩畫會研究所に入る方

便利ならん、又我々は水彩に多大の趣味を有すればこそ種々盡力してゐるのである。

東京發行の新聞紙にて美術上の理論雜話等又は美術界消息大家先生の御高説等日々掲載するもの二三種承りたく候(M・Y・生)○日々美術談など載せる新聞紙はなし、比較的多く此方面の記事に富むは、都、讀賣、國民等なり。繪具の堅くなり筆先で容易に溶けぬやうになつたのは如何してよろしきや(二葉)○取出して茶椀に入れ湯を注ぎて暫時おくと柔らかになるべし、上づみの水を

捨て、ガラスの上にて竹べらにてよく練り、リスリン少許を混じ置くべし、汚れて居る時は取捨るより他に手段なし。■我國出版の

著名なる洋畫集并びに發行處定價、發行年

月(川越コバヤシ)○畫集としては時々展覽會のカタログより他になし、カタログは本郷湯島切通坂畫報社に問合せされたし。ボ

ール紙に白と黒とのペンキ様のものにて書いたる畫あり一見油繪に似たり何といふ種類の繪にや(靜遠)○見た上でなくば判らぬ

## 讀者の領分

注 水彩畫に無關係のものは御断り。印は  
編者の答、投書の要旨のみをかゝぐ

■水彩畫初步第四集、口繪數葉なき水彩畫手引、ヴァイオリン教科書、ハーモニカ獨習書以上金壹圓五十錢に新なる風景畫帖、『みづゑ』二十五、金櫻堂の水彩畫帖と交換されたい(淺草向柳原二ノ一、江波隆太郎)。■自筆水彩繪葉書の交換を願ふ但畫面に文字なきを願ふ(廣島市細工町二十(宮田欣司)

も極めて面白からず。水の圖は色彩單調なれど感じはよし、極手前の岸はモット強く畫かれば繪に遠近見えず。○立花氏へ十和田湖の朝は、前景の水に映する船の影が硬じ乏しく、漁舟は波の上に泛ぶといふよりも寧ろ海上に置であるやうなり、雲の形も實際かは知らぬが面白からず。

## 新入會者廣告

伊豫國周桑郡吉井村

日野松太郎

小樽區手宮禮町二十一番地

鈴木登

大阪府泉州郡北信達村大字牧野

梶本氏方 箕浦トヨ

福島縣伊達郡東湯野村

堀江繁太郎

## 編者より

以 上

十一月 日本水彩畫會

◎海老名氏へ 山の繪は忠實苦心の作なれども、空の描寫不親切なり、又畫面を同一の光りにて畫ぎし爲め散漫の跡あり、位置

\*

\*

\*

\*